

『歌声にのった少年』

アルバトロス、2016年

今月のTOPIC

パレスチナ映画は、観た後にどつと疲れるような政治的に重い内容が多い。『歌声にのった少年』のハニ・アブ・アサド監督による『パラダイス・ナウ』や『オマールの壁』も、イスラエル占領下に生きる青年の閉塞感や心の葛藤を描いている。本作は数少ない希望の物語である。



モデルになったのは、人気オーディション番組「アラブ・アイドル」で優勝したムハンマド・アッサーフという実在の人物。ガザ地区で生まれ育った美声の少年が、病で亡くなった姉との約束を守るため、ガザの壁を越えるという危険をおかして番組出場を決意し、勝ち抜くたびにパレスチナ国民の期待を一身に背負う存在となっていく。過去70年間、政治的には負け続けてきたパレスチナの人びとが、あたかも勝利の夢を彼に託すかのように。

映画は、最後の回で優勝した番組の映像や、それを見守るガザ地区の人びとの様子を映し出す。発表の瞬間、それはまさにムハンマドの声がパレスチナの人びとの心をつなげた瞬間だった。映画を観ていた私も、パレスチナ人の夢と希望が実現した場に立ち会うことができたとの喜びと感激でいっぱいになった。

小林和夫(こばやし・かずお/ATJ)

『歌声にのった少年』の詳細はアルバトロスの公式サイトへ <http://www.albatros-film.com>



特定非営利活動法人APLA(Alternative People's Linkage in Asia) フィリピン・ネグロス島の30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 www.apla.jp

株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ) パラゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者の顔と顔が見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 <http://altertrade.jp>

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F
TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp

過去のPtoP NEWSはこちらから
特定非営利活動法人APLA

PtoP NEWS vol.18 2017.09

PtoP: 作る人と食べる人が共に支え合う仕組み



特集

森のカカオをお届けします!



ゴミ回収で清潔な住環境の大切さを理解してほしい

イスマイルさん (KOINゴミ回収プログラム担当) from インドネシア

エコシュリンプを製造しているオルター・トレード・インドネシア社(ATINA)はエビの生産者とともに、地元の環境を良くするためのNGO「インドネシア保全(KOIN)」を立ち上げ、持続可能なエビ養殖技術講習会の開催、河川清掃やマングローブ植林などに取り組んでいます。2015年からは、エビ養殖池地域の村々でゴミの回収プログラムを実施してきました。

日本では家庭ゴミを行政が回収するのは当たり前ですが、インドネシアでは行政のゴミ回収が実施されていないところが圧倒的に多く、ゴミが道路や川に投棄されることが多いのです。KOINとしてはエビ養殖池に流れる川の水をきれいにするために、住民の協力によるゴミ回収を定着させようということで、各家の前にゴミ箱を配布して毎日ゴミを回収し、それを分別処理するプログラムを開始しました。

プログラム開始当初、対象のクダウン・ペル村で興味を示した住民はそれほど多くありませんでしたが、村でゴミ回

民衆交易を陰で支える現地の方々を紹介します!



取人となったイスマイルさんが、KOINが提供したゴミ箱を設置した家々のゴミを毎朝集める姿は村の住民の目に留まり、KOINのゴミ回収プログラムに参加したいと言う人がどんどん増えていきました。当初100軒くらいの参加を見込んでいたところが、数カ月のうちに400軒以上の家の前にKOINのロゴ入りゴミ箱が並ぶようになりました。

ゴミ回収役を引き受けたイスマイルさんは、日雇いで大工仕事などを行っているのですが、早朝の数時間をゴミ集めに割り、回収したゴミのうち再利用できるものは分別しそれを廃品回収業者に売っています。このプログラムに参加している住民に話を聞くと、皆口を揃えて「ゴミを回収してもらえるので嬉しい」と話し、路上もゴミが散らかることなく、きれいになりました。「ゴミを適切に処理することで生活環境が清潔になることを住民が理解するまで、忍耐強く人びとに働きかけていかなければならない。それをするのは自分たちしかない」と語るイスマイルさん。年間通じて休みなしの地味で大変な仕事ですが、やりがいを感じているようです。継続は力なり、文字通り「縁の下のカ持ち」として、毎日早朝からゴミ回収を続けています。

津留歴子(つる・あきこ/ATJ)

KOINによる
ゴミ回収風景

NGO「インドネシア保全(KOIN)」の詳細はオルター・トレード・ジャパンのサイトへ <http://altertrade.jp/archives/12401>



森のカカオをお届けします!

from インドネシア・パプア



カカオ袋のラベルを書く、
カカオキタ社代表のデッキーさん

収穫量は良好!

インドネシア・パプア州のカカオ産地では、去る7月に11トンのカカオ豆をチョコレートの原料にするため、二次加工所がある東ジャワ州のスラバヤへ向けて出荷しました。

振り返ってみれば、2016年はカカオキタ社が買付けをしている村々の収穫量があまり芳しくなかったのですが、今年は3月ごろから収穫量が増え、半年で10トン近く(昨年は約6トン)の豆を集荷することができました。カカオキタ社のスタッフや生産者たちは、収穫量が増えたのはある事が功を奏したと信じています。そのある事とは、カカオ

の森の手入れです。

そもそものはじまりは、生産者たちが「カカオに病気が蔓延した」「カカオの木が古くて実がつかない」とカカオキタ社代表のデッキーさんに訴えてきたときに、デッキーさんが「嘆く前に、まずはあなたのカカオの森をきれいにしてみたらどうですか?」とアドバイスしたことにありました。そして、昨年末にカカオ生産者たちと一年を振り返る話し合いをしたときに、「来年はカカオを植えている森の手入れをしよう」と約束をしたのです。



発酵後の豆を乾燥台に広げる

森の手入れで大変身

こうした経緯で始まった「カカオの森の手入れ作業」。ブラップ村では2月から週に2~3回の頻度で生産者一人ひとりの森(平均1~2ヘクタール)の手入れ作業をしました。20~30人の仲間総出の協働作業です。

この作業を通してわかったのは、カカオは他の樹木に混じって植えられており、鬱蒼とした森の中で太陽の光を十分受けることができず、実が腐っていたり、カビが生えてしまったりしていたことです。またカカオ周辺の木々が行く手を遮断するように逞しく生い茂り、奥の方に植えられたカカオはそこに到達するのが大変なので、実をつけても収穫されず放置されていることも多々あるようでした。

大ナタを手にした生産者たちが森に入り、一斉に下草や周囲の木々の枝落としをすると、森は日

の光を受けて、「ここにも、あそこにも、カカオがあった!」というようにカカオの木々がくつきりと浮かび上がってきたのです。

そして「カカオの森の手入れ作業」の成果があらわれたのかのように、3月からカカオの収穫量がぐっと増えてきました。月に20日近く、カカオキタ社の軽トラックは片道2~3時間かかる産地を走りまわり、一人ひとりの生産者から豆を買付けました。

今年に入ってからはスナとオンブロップという2つの村もカカオキタ社の生産者グループに仲間入りしました。これらの村でもさっそく森の手入れ作業に着手しています。新しい仲間にも、貯蓄プログラム(豆の売上の一部を貯金する)を紹介し、多くの生産者が民衆信託銀行で口座を開設し真新しい貯金通帳を手に入れました。



生い茂った木々と格闘

周囲を整備したら、
こんなに実をつけた
カカオがありました



ロット毎にラベルで色分けした出荷豆

生産者が育てたカカオ豆、スラバヤへ旅立ち

カカオキタ社の倉庫では、買付けた生豆を発酵・乾燥させたり、乾燥豆を追加乾燥して水分含有量を適正な値にします。生産者が収穫したカカオ豆を良い品質で出荷できるようスタッフは倉庫に住み込みで作業を続けました。

スラバヤへの出荷の1週間前からが追い込み作業です。このときは、臨時的助っ人も含め10人の若者たちが豆の計量、袋詰め、ラベルづくり、袋の縫い付けを絶妙なチームプレーで手際よくこなしていきました。こうしてすべての準備が整い、ラベ

ルが縫い付けられた袋が整然と並ぶ倉庫で、カカオキタ社のスタッフは「あー、明日でこの豆たちもお別れか」とちょっと寂しそうでした。

7月18日、368袋のカカオ豆が1時間もかからずに20フィートのコンテナに積み込まれ、ジャヤブラ(パプア州の州都)の港へと向かいました。さあ、ここから森のカカオが手から手へと手渡される長い旅が始まります。

津留歴史(つる・あきこ/ATJ)



インドネシア・パプア州の豊かな森で穫れたカカオを原料に使ったチョコレートは、「チョコラ デ パプア」シリーズとして販売しています。

☞ <http://altertrade.jp/cacao>